
写真における時間性と意味成立の関係

——時間経過による撮影者と観者の時間的隔たりの点から

江本紫織（九州大学）

写真は原則として、過去の現実を写し出す。その意味で時間は、写真の意味に関わる中心的要素である。しかし近年の写真をめぐる状況の変化から、写真の時間性を単に過去の現実を指示するものと捉えるだけでなく、写真の時間性と写真の意味の多様性の関係を解明する必要性が生じている。そこで本発表では、写真における時間性の内、特に撮影からの時間経過が写真の受容に如何に作用するのかを考察する。さらに、時間経過と諸要素の関係を軸とした写真の意味構造の呈示によって、他の視覚表象の場合と区別可能な意味の在り方を示すことを目指す。

撮影からの時間経過による作用の一つとして、クラカウアー（Siegfried Kracauer, 1889-1996）やソントグ（Susan Sontag, 1933-2004）は写真と現実の対象との対応関係の希薄化を挙げている。そしてそのことは、写真を単なる空間的配置図に変える他、藝術写真へ高めるなど、その属性が変化する要因になると彼らは指摘した。確かに、撮影当時観者と共有できていた要素が減少し、当初と異なる解釈を生じさせる可能性は否めない。

しかし、これらの時間経過によって生じる意味の変容は、時間要素の変動によって成立する意味の一つにすぎず、全ての写真に等しく起こるものではない。なぜなら、写真の意味生成に対する時間的隔たりの寄与は、それ自体で成り立つものではないからである。そこで具体的な作品解釈の事例について、時間の他、撮影者・観者の態度や写真の対象にまつわる情報（二次的情報）などの要素同士の連関や、その変動にあたっての撮影者・観者双方への影響の在り方を分析する。その結果、指示対象との関係性や写真に関する情報が多く参照される際には、その大小に拘らず時間的隔たりは解消される傾向にあることがわかる。観者が対象に注目したり、写真上では見られない別の時点の指示対象の在り方を思い描いたりすることが可能になるのは、このような構造に基づくと考えられる。一方、参照すべき指示対象との関係性や情報が欠如・不足している場合、上記のような構造に基づく受容がなされるとは限らない。この際観者は、時間的隔たりをより強く意識しつつも、写真の表面にとどまる見方をすると考えられる。このように、写真の意味構造への時間の作用を諸要素間の関係から検討すると、時間的隔たりの有無のみならず、その解消の質的に異なる在り方が写真の意味生成に深く関わっていることが明らかである。

時間性の検証は、写真における時間性が諸要素との関わりの中で作用の在り方を変化させることを示すと同時に、たとえ時間が意識されていないと思われる写真であっても、何らかの形で時間性が関与していることも明らかにした。これは写真の意味構造が絵画等の他の視覚表象から区別される点である。現代において多岐にわたる写真の利用や受容は、このような変幻自在な写真の時間性に負っているのである。